



時代考証あれこれ

神戸大学 経済経営研究所

准教授 高槻 泰郎

2015年9月28日から放送の始まるNHK朝の連続テレビ小説「あさが来た」の時代考証を担当することになった。と言っても、筆者一人で引き受けるわけではなく、他の先生方と共同で引き受けることになるのだが、率直な感想を言えば、大変なことを引き受けてしまった、ということに尽きる。

私のぼやきは後段で展開するとして、とりあえずドラマについて紹介したい。NHK朝の連続テレビ小説、通称・朝ドラでは、女性主人公（ヒロイン）が成長していく過程が描かれるのが王道である。「あさが来た」もその点では王道を行くのだが、これまでと大いに異なる点がある。それは、朝ドラ史上初めて、^{ちよんまげ}丁髷が出てくるということである。

今回のヒロインのモデルは、廣岡浅子（1849-1919）という実在の人物で、豪商三井家に生まれ、17歳で大坂の両替屋・加島屋五兵衛家（本姓・廣岡）に嫁ぎ、明治に入ると実業家として活動し、鉱山や銀行の経営に関わり、現在の大同生命保険、日本女子大学の設立にも関わった人物として知られる。女性の社会進出を現政権が後押ししている最中であるだけに、タイムリーな人選と言えらる（ちなみに当研究所も、女性テニユアトラック教員を公募中である（2015年6月19日現在））。

朝ドラではヒロインの幼少期から描かれることが多いのだが、今回の場合は江戸時代から話が始まるため、「朝ドラ初の丁髷（NHK大阪ドラマ制作班談）」ということになる。江戸時代の時代考証ということであれば、他にも候補者が沢山いたのであろうが、ヒロインの嫁ぐ先が、大坂の両替屋、それも一般に想像される両替屋とは異なる、対大名融資や米市場参加者への投資資金供給に特化した両替家であって、なかなかイメージがしにくいこともあり、江戸時代における加島屋五兵衛家ならびにその本家である加島屋久右衛門家の経営を分析している私に声がかかったというわけである。

さて、ぼやきである。時代考証という作業が、実は多岐にわたるものであることを、話を聞いたときは認識していなかった。台本のチェックは想定内であるにしても、初校・二校・三校と、校訂を加えるたびにチェックをしなければならぬとは思ってもみなかった。また、小道具の監修、ドラマに登場する手紙の「古文書化(?)」、ドラマのワンシーンに使えるような小ネタの提供など、それは「考証」なのか?とってしまうような作業も含まれていて驚いた。もちろん、手に余るものは断って構わないのだが、ドラマ制作班の方々の「少しでも良いドラマにしたい」という熱意に触れると、できる限りは手伝わねばならないような気がしてしまう。このままでは本業に差し支えかねないので、現在は関与する局面を最小限にして頂いているが、それでも少なからぬ負担が生じている。

さりとして、考証を進めるなかで新たな発見があったり、考えてもみなかったような視点を得られたりすることもある。例えば「両替商」という言葉である。日本人であれば一度は聞いたことのある言葉であろうが、江戸時代にこの言葉は存在しない。少なくとも、私が江戸時代の史料を読んでいる限りでは「両替屋（店）」ないしは「両替」などと呼びならわしている。このことに私が気づいたのも、台本に書かれている台詞に「両替商」という言葉が出てきて、ふと違和感を覚えたからである。

もちろん、学術用語として使うのは全く問題ない。さらにいえば、ドラマに挿入されるナレーション部分で「両替商」という言葉が出てくるのも問題ない。しかし、江戸時代を描いたドラマの登場人物が「両替商」と言っていたら、それはおかしいということになる。

こういう時に頼りになるのが究極の国語辞典、日本国語大辞典（通称「ニッコク」）である。「両替商」を引いてみると、語釈には「「りょうがえや（両替屋）」に同じ。」とあって、最も古い用例として1885年の東京日日新聞の記事が出ている。つまり、江戸時代には両替商という言葉が見られないことを示している。そこで「両替屋」を引いてみると、語釈には「手数料を取って金銭の両替を行なう店。また、その人。江戸時代、両替制度の発達とともに、金銭売買、預金および貸付、手形の融通、為替取組、金銀の相場立などの金融業務も営んだ。両替屋の名称が初めて公認されたのは、寛文二年（一六六二）といわれる。両替店。両替商。」とあって、最も古い用例として、1638年の俳諧・鷹筑波集が掲示されている。つまり、ニッコクは「両替商」が近代以降の呼称であることを、しっかり弁えていたのである。不勉強、恥ずべし、である。

このように書くと、「お前はそんなことも知らなかったのか」と、（後出しジャンケンではないことを厳密に証明することのできない）お説教をしてくる人が現れるそうだが、そういう方々も、おそらく論文では「両替商」という言葉を使っているはずである。本当は「両替屋」という呼称を使った方が適切かもしれないのに、である。もちろん、学術論文において重要なことは読み手に対して正確に論理を伝えることであるから、「両替商」の呼び名が人口に膾炙している以上、研究上の呼称は本質的な問題を構成しないと言える。しかし、ドラマではこだわりたい。このコラムを読まれた奇特な方は、秋からの放送に耳を澄ませて欲しい。台詞では「両替屋」、ナレーションでは「両替商」になっているはずである。

言葉一つとっても、普段全く意識しないことを意識させられる、ということが考証作業の研究上の効用かも知れない。「両替屋の奉公人は、朝から夜まで、どのような仕事をしているのでしょうか?」、「両替屋は現金をどこにしまっているのでしょうか?」、「丁髷はいつ頃からなくなっていくのでしょうか?」。ドラマ制作班から寄せられるこういった疑問は、研究を進めていくなかでは、まず浮かんでこない。もちろん、全ての疑問に答えられるわけではないが、時代考証という作業を通じて、これまで考えもしなかったことと向き合う楽しさと苦しさを同時に味わっている。

ドラマはようやく撮影が始まったばかりである。先は長いが、楽しみながら考証を続けていきたいと思っている。